

2017年7月 ネルソンマンデラ人権法模擬裁判大会・学生コメント全文

＜山崎千鶴さん・教養学部4年＞

今回は私の模擬裁判経験の中で初の海外大会の参加となりましたが、大会では弁論についてと国連について2つ大きく思うことがありました。

まず弁論について、大会を通じて一番印象的だったのは、知識量を大きく問われる日本大会に比べ、海外大会では相手にどう伝えるかの姿勢・態度という点においてスピーカーの中で大きく差がつくということでした。模擬裁判において弁論者は、裁判官が判決文を書くことを手助けする位置づけというのを意識する必要があり、それにあたり、裁判官から厳しい質問がとんでくることもしばしばあります。個人的にはそれらの厳しい質問にも頑張って対応したつもりなのですが、実際私が裁判官から頂いたフィードバックは、「知識はあるが、自信がなさそうである」というものが大部分を占めていました。たしかに、自分は言語や弁論の自信のなさから無意識に下を向いたり、上を向いたり裁判官の目をみて話すということや、断言しきる、ということが他チームに比べてできていなかったように思います。特にそれを感じたのは決勝戦でした。カナダ対アルゼンチンのチームで、正直内容は特段優れているという印象はなかったのですが、何より落ち着いて堂々と弁論している姿が、自分とは対照的であるように感じました。

次に国連について、今回の模擬裁判大会中は丁度国連内の他会場で国際法の重大な議論がなされている期間だったため、国際法委員会や自由権規約委員会、女性差別撤廃条約委員会などの会議を傍聴させていただく機会がありました。各国の専門家が責任をもって発言をし、どのように人権を守っていくのかについての決議を行う歴史的な瞬間を体感できたのは非常に貴重だったと思います。また、将来自分もこのように世界で活躍できる人材になりたいと思う瞬間でもありました。個人的に悲しかったのは、国連内では公式言語ではないことから日本語が全くと言っていいほど見当たらなかったことです。当然と言えば当然なのですが、日本語というより、そもそも日本の影が薄く感じられたのが悲しかったのだと思います。実際は日本からICU出身で国際法委員会委員の村瀬信也教授や自由権規約委員会委員長の岩沢雄司教授など、多くの人材が国連機関に派遣されています。しかしながら、積極的に自国の国際的貢献をアピールする他国と比べ、（アピールすることが良いことかの議論はさておき）相対的に日本はそういったアピールがあまりされていないと感じることがありました。あとは、国連図書館に圧倒されたことも思い出としてあります。蔵書数はもちろんのこと、誰でも好きに好きなだけ勉強できる環境があること、平和や戦争の歴史を感じさせる芸術品、重厚感あふれる建築は圧巻でした。また、国連図書館が“Instrument of international understanding”であるというお話を聞いたときも、何か心にぐっとくるものがありました。

今回の経験を通じて、国際的に活躍することとは何か、また国際貢献するには何が前提となるのかを大きく考えさせられました。

パリでのOECD訪問で、OECDがより身近な組織であるように感じられました。まずはICU生であった宮本さんのお宅に伺った際、OECDの開発部門についての話や働いている際に苦労していることを聞かせていただいたことが印象的でした。宮本さんが小さいころ、貧しい人を助けたい、自分はこんなに楽をしていいのだろうかという気持ちを感じたことがきっかけで、大学時代にはボランティア活動を積極的に行い、社会人になってOECDという組織でその志を持ち続け働いていらっしゃる姿が素敵だなと感じました。

次に大江大使の公邸に伺わせていただき、外交官の役割について学ばせていただきました。学生ながらピアノの演奏や美味しい日本料理など豪華なおもてなしをしていただき、言葉だけでなく、このようなおもてなしの心が外交の基本になるのだなと考えさせられました。また「外交は個の力、いわば個人プレー。個人がうまくパフォーマンスができなければ、国に影響がでるという責任感がある」というお言葉も印象的でした。

田熊さんとの面会では、OECDはリサーチを専門に行っており、経済や教育という分野で、データを集め、現状分析を行う機関であるということ、政策実施は政治的要因が絡むため、OECDは何らこうすべきであるという提案は行わないこと、非加盟国も巻き込んでいけるような取り組みを現在行っていること、等を学びました。

このお三方のお話を通じて、漠然としたイメージであったOECDがより身近に感じられたのはよかったですと思います。

<鳴島歳紀さん・教養学部3年>

国連の環境には大変驚きました。まず、リサーチのしやすさです。全4試合あったのでその合間に相手が使ってきた判例等を自分のケースに盛り込めるようにリサーチをしたりしますが、ICUからではいくら探しても見つからない論文や、アクセスができないものの殆どが、国連のパソコンからでは全て簡単に見つかりました。また印刷も40枚まで無料でできたので、時間が無く覚えられない資料を試合にすぐに活用することができました。まさに研究者にとって夢のような環境で、いつかこの環境で心行くまでリサーチを試してみたいです。

一番感動したのは、空き時間に国連で開催されていた様々な重要な会議を傍聴できたことです。各国を代表する教科書で見たことのある専門家の名前がずらりと並んでおり、また傍聴各席には各国語に翻訳して聞けるようにヘッドフォンが備え付けてあり、自分たちが私服で座っている不自然さに戸惑いました。

ここで重要な決議の瞬間に立会いました。人道に対する罪などに対して主権免除の例外とするものです。この管轄権の問題は海洋法の模擬裁判でも問題になっていて、特に難しかったパートだったので論文を含めると100冊は目を通して、さらに模擬裁判の裁判官の方にも話を伺って、それでも答えが出なかった部分で、その議決に立ち会えたことに感動し、さらに最先端の問題を扱ってくれる模擬裁判をやってよかったと一番感じた瞬間でした。

最後に、滞在を通して苦労した点について。それは語学でした。ジュネーヴは殆ど地理的にフランス圏に属していることもあり、皆フランス語を話します。

皆がバイリンガルかと思えばそうではなく、英語が全く通じない人も少なくなく、またフランス語が話せないとわかると国連内であっても明らかに態度が変わったりして、常に不安が伴いました。また、人権委員会等で学生として紹介頂くときも、いつも「何語を話すことができる」という話題が出るため、フランス語、中国語、ドイツ語等が堪能な他のICU生とは異なり、日英だけしかできない自分はマルチリンガリズムを掲げるICUを代表して参加する者としてその都度申し訳ない気持ちになりました。

しかし一方で励みになったこともあります。初めて海外で自分の英語が伝わったことです。自分は海外経験はありましたが英語が話せるようになったのはここ一年でディベート部の活動で身に付けたものなので、海外で自分の英語がそのまま通じてコミュニケーションを取れた

のは本当に嬉しく、自信になり、最初は厳しかったながらもディベートや模擬裁判に挑戦して本当によかったと思いました。また、フランス語も、わからないなりにフレーズだけを本で覚えて発音すると、急にフランスの方が笑顔で優しくなり、受け入れられた感じがして英語だけでなくその国の言葉を学ぶ重要性を身にしみて感じました。特にフランス語はアフリカ系の裁判官の殆どが他の欧州系の裁判官と同じく母語としていて、ジュネーブという場に多様性をもたらしている1つの大きな鍵なんだと実感しました。

パリで一番印象に残っているのは、ICUのOGであるOECD職員の宮本さんとお話できたことです。OECDのオフィスの目の前のご自宅に招いて頂き、そのお家も個人宅ながら装飾や家具一つ一つが非常に洗練されていて、フランスの美意識を体感しました。

また、宮本さんのお気遣いがすばらしく、皆がソファーに緊張して浅く腰掛けている中、お茶を入れたりお菓子を出したりまた音楽をかけたりと一人だけ忙しそうに立ち歩いている、なんだかおばあちゃんの家に来たような、そんな感じがして、こちらも徐々に緊張が緩まっていったと思います。一通り堅い質問が終わった後に宮本さんはOECDの面白い内情も話してくださいました。ママ友とのバイリンガルの子育てについての話題まで出ました。こういう人と働けたらな、と国際機関で働くことに対して初めて強い興味が湧きました。

また、大江博・OECD大使は大変ご親切に夕食会へ招いてくださいました。部屋にはグランドピアノが置いてあって、それをなんと大江大使ご自身が演奏して下さいました。柔らかく、かつ情熱的かつ激しい味のあるタッチで、胸が熱くなる演奏でした。音楽はどこへいってもわかりあえる、言わば唯一の共通語であるように感じました。

そして一番印象に残ったのは、大使夫人です。親しく話題を振ってくれたりして一気に大江大使との距離が縮まって話しやすい空気になりました。このとても微笑ましく暖かい夫婦の中に巻き込まれたら誰でも笑顔にならざるを得ないなと思いました。また大江さん夫妻は終始庭の野良猫のえさの心配をされていて、そこから溢れ出る暖かい人間味を感じ、国際的な場での仕事をする人達の堅苦しいイメージが崩れ、いつかはこういう人達と交流する場にいたいと思うようになりました。

<中來田桃さん・教養学部2年>

今回ジュネーブでは、「柔軟性が鍵となる」ということが一番の教訓になったと思います。これは、模擬裁判大会、国連職員の方々や参加者との交流、そして大使館訪問に共通していたと言えます。まず模擬裁判での弁論では、スピーチの途中で飛んでくる様々な質問に答えつつも主張を全て言い終えなければいけないという難しさに直面しました。その際に常に裁判官の方から「もっと柔軟に弁論を対応させた方が良い」という改善点を指摘されました。確かに、柔軟であるためには深い知識はもちろんのこと時間の管理や素早い決断力など高い技能が必要とされます。そのようなスキルはこれから様々な場面や活動で重宝するであろうものであり、積極的に養うべきだと感じました。また、世界中から集まる職員の方々や参加者と交流も話題を変えたり、相手の宗教や政治的背景に気を使いながら楽しんだり、という面で柔軟性が大事となっていたと思います。最後に初めての経験であった大使館訪問では、限られた時間の中で失礼のない態度で良い議論ができるように柔軟に対応できたと思います。

さらに、実際に国連で弁論できたこと、図書館でリサーチできたことや重要な国際会議を傍聴できたことは、以前まで考慮していなかった「国際機関で働く」ということを鮮明にイメージするきっかけとなりました。また、湖と山がある風光明媚なジュネーブを模擬裁判の仲間と散歩したことも今回の良い思い出となりました。

パリでは、大江博OECD大使、ICU卒業生の宮本様と教育部署の田熊様と面会させていただいたことが一番の収穫になったと思います。それぞれの異なる視点からのお話を伺えたことで同じOECDでも多角的な理解ができたと思います。特に宮本様とはパリでICUと将来の話に花を咲かせ、大変活発なディスカッションができ改めてICUでの教育の強みを実感しました。パリ滞在の最後に訪問させていただいたOECDのオフィスでもこれからの課外活動に役立つような情報もいただき大変嬉しかったです。

最後に、今回の模擬裁判大会を応援してくださったJICUF、松田先生、そしてクラスメイトに感謝を申し上げたいと思います。

<薄久保峻さん・教養学部2年>

The hypothetical case to argue as applicant and respondent required preliminary research of various international law concerning human rights, its sources, international treaty bodies and organizations that help to advance the further protection of human rights. All the research was intriguing as it covered the whole advancement of the mechanism of international law, and how we could apply them to specific cases.

The experience in the moot court rose my strong awareness of how much ardor the foreign participants must have taken in preparation and their concern towards international issues. It served as the closest experience to know what the court would be like and how the spectrum of jurisdiction, admissibility, merits and remedies should be considered. Not limited to mooting, actually exposing myself to observe the work of the office of the United Nations High Commissioner for human Rights, conferences of the Human Rights Council and Committee on the Elimination of Discrimination against Women inspired myself to get the glimpse of the actual work. Being able to actually see such organizations served as a strong feedback to my research. I realized on how important respecting every language means in these conferences concerning discussions and after report, as it directly expresses our attitude towards each state. The gravity of being multilingual especially such as in French in this environment stroke me. We were lucky enough to meet Professor Murase of the International Law Commission, graduate student of ICU and see the actual passage of a case draft. We also met Professor Iwasawa, chairperson of committee of the International Covenant on Civil and Political Rights, and Mr. Ihara, Ambassador of the Permanent Mission of Japan to the International Organizations in Geneva, and Mrs. Hayashi working at the Committee on the Elimination of Discrimination against Women. It was a precious opportunity to actually meet in person to who is currently working at international bodies or the ministry of foreign affairs and receive valuable comments to our questions.

The experience at Geneva was a real treasure as it not only gave me the opportunity to prepare and participate in the moot to amplify my insight upon international law and Human Rights, but also directly stimulate my interests towards such actual working bodily organizations by interacting with persons and feel the environment, and utilize the facilities of the United Nations. To my understanding, it is of quite obscureness to focus your aspiration to international issues without substantial experience in knowing what it is like to participate in advocacy or see like-minded organizations. I strongly believe this experience is to profoundly affect my future course and hope that other students who have a strong interest can receive such opportunities.

As one of our Nelson Mandela moot members was the Japanese student ambassador of OECD, we appointed three OECD related professionals in Paris. Mrs. Miyamoto, Development Cooperation Bureau Senior Policy Analyst of OECD, Mr. Oe, Ambassador of OECD, and Ms. Taguma, Education and Training Policy Division Senior Policy Analyst of OECD.

Each of the three respectively provided a different impression upon their view of working. In respect to the OECD members, we were able to collect valid and direct information to help assist our student ambassadors' hereafter activity in promoting the work of OECD to Japan. It was a valuable opportunity to get to hear their comments towards OECD, as each showed a somewhat different insight in capturing their work. In accordance with the promotion of OECD student ambassador, I hope students of ICU and Japan who have strong interest in participating in international agencies can receive some stimulation and opportunity to step forward in engaging in such fields.

<ジョゼフ・スミスさん・博士前期課程2年>

I am a proud International Rotary Masters' Peace Fellow from Sierra Leone, West Africa. Participating in a legal argument has always been my dream since. Hence, Meeting Professor MATSUDA Hiromichi as my Professor for the 'Law and Peace' course was a great pleasure that motivated me for more legal courses at the International Christian University (ICU).

With the above establishment, I am very pleased to would have selected the 'Advance Studies in Legal Science' Course in the Spring Semester, which gave us (my classmates and me) the opportunity to develop a Memorial for participating in the 7th Nelson Mandela Moot Court Competition in Geneva, July 17-21, 2017. Drafting the memorial was very challenging, as well as exciting- especially in doing research on the legal instruments that would support our arguments as an 'applicant' and 'respondent' in the case problem presented to us by the organizers of the 2017 moot court. The drafting of the memorial was more on key issue-areas including, understanding the case; research on legal international human rights instruments (In terms of, customary and treaty laws, writings of international lawyers and legal institutions etc); finding related case laws and presenting logical arguments. However, our efforts as ICU team-successfully led to ICU active participation in the Nelson Mandela Moot Court competition which is a president for coming students. To crown it all, I would like to thank Professor Matsuda for

his relentless tutoring of our team, by inculcating in us strong legal understanding and critical thinking. I remain optimistic that ICU would continue participating in this highly competitive event and thus, would bring the award to Japan in the immediate future.